

第149回 三方限古典塾 ('19, 3, 14)

「南洲翁手抄言志録」(その8)

34 漸は必ず事を成し、恵は必ず人を懐づく。歴代の姦雄の如きも、其の秘を窃む者有り、一時だも亦能く志を遂げき。畏る可きの至りなり。(言志録- 223)

(意識) 急がずに順序を追ってゆっくり事を運べば、必ず成功するし、精神的・物質的に人に恩恵を施せば、必ず人を抱き込むことができる。歴代の心悪しき姦物では、この秘訣を盗み、一時的ながらもその野心を成し遂げた者がある。実に恐ろしいことだ。

(余説) 「これは急ぎの御用だから、ゆっくりやってくれ」とは、幕末の外国奉行だった川路左右衛門尉聖謨の部下への指示です。まさに成熟した大人の見識です。彼は柔軟な思考と、清廉な暮らしぶりの開明派でしたが、江戸城の明け渡しを見届けてピストル自殺を遂げます。「急いては事を仕損じる」や「急がず、休まず」もよく聞く格言です。

35 匿情は慎密に似たり。柔媚は恭順に似たり。剛愎は自信に似たり。故に君子は似て非なる者を悪む。(言志録- 224)

(意識) 感情を抑えて、本心を外にあらわさない匿情は、慎み深い慎密に似ている。柔和で媚びへつらう柔媚は、恭しく従う恭順に似ている。剛愎で道理に逆らう剛愎は、己の力や正しさなどを過信する自信に似ている。このようなわけで、よくできる者は「似て非なる」者を憎むのだ。

(余説) 「似て非なる」とは、孟子に出てくる言葉で、いかにも道理にかなっているようで、実は正しくないものことです。いかにもまぎわらしいものが今の多い世の中ですが、できることなら、本物と偽物とを峻別できるだけの目を持ちたいものです。

(参考) 孟子・尽心「孔子もまた似て非なるものを悪む。雑草を悪むのは苗と見分けがつかないから、佞を悪むのは義と紛らわしいから、口達者を悪むのは信を乱すから。」
武田信玄「主将の陥り易き三大失観 分別ある者を悪人と見ること。遠慮ある者を臆病と見ること。軽躁なる者を勇剛と見ること」 信玄もなかなかの人物のようです。

37 誣う可からざる者は人情にして、欺く可からざる者は天理なり。人皆之を知る。蓋し知れども而も未だ知らず。(言志後録- 117)

(意識) 嘘をつくことができないのは人情であり、騙し、惑わし、嘲り、侮ることができないのは天理である。人は誰でもこのことは知っている。(しかしこれに反することが多いのは) うわべだけで知っていて、本当のことは知らないのである。

(余説) この条は今一つ理解し難い感じですが、秋月種樹は[評]で、江戸城明け渡しの際に、幕府の軍艦で函館・五稜郭に逃れ、そこで戦い敗れて降伏・投獄された榎本武揚について評価しています。理由は、榎本がオランダで学んだ「海律全書二巻」を、わが身と共に滅ぶのは惜しいと官軍に渡したことが「誣う可からざるの情」であり、その後彼が明治政府で海軍卿や四大臣を歴任、最後は子爵の位を受けるなど、旧幕臣では異例の地位を占めた

のは天理であると言っています。

マイナス体験が、彼の独創力や決断力・意志力などを育んだのでしょうか。同じ幕臣でありながら、ピストル自殺を遂げた川路左右衛門尉聖謨の場合と比べてどう見ますか。

38 知は是れ行の主宰にして、乾道なり。行は是れ知の流行にして、坤道なり。合して以て体軀を成せば則ち知行なり。是れ二にして一、一にして二なり。

(言志後録－127)

(意識) (人には知と行との二つの働きがある。ところで、) 知は行を司るものであるから、天道である。行は知から流れ出したものであるから地道である。この二つが合して我々の体を形成しているので、知っていて行うのでなければ、真に理にかなった行とはいわれない、行っていても知を驗さなければ、真の意味で知っているとはいわれない。このように知と行は二つにして一つであり、また一つにして二つでもある。

(余説) この章は、先月の26でも取り上げた、中国宋代・王陽明の「知行合一」を説明したものです。知は一般に知っていること即ち知識と解されますが、むしろ智慧の方が相応しいかも知れません。智慧とは、人生の経験を種々通りぬけて鍛えられ磨かれて、人情の機微も分かるような叡知でもあります。この「知行合一」の思想が、西郷どんをはじめ幕末の薩摩藩での主流となり、それが明治維新の大きな力になったように思います。

(参考) 曾野綾子「知識と体験とは全く別物であり、体験に知識が供給される時に初めて思想として命が吹き込まれる。その一方が欠けたら役に立たない。」(人間の基本・新潮新書)
曾野の言葉は、朱子学の「先知後行」より、陽明学の「知行合一」に近い感じです。

39 学は自得するを貴ぶ。人徒らに目を以て字有るの書を読む。故に字に局して、通透するを得ず。当に心を以て字無きの書を読むべし。乃ち洞して自得するあらん。

(言志後録－138)

(意識) 学問をするには、物事の道理や要点を見分け、自らの心に会得し悟る事が貴い。しかるに世人は、徒らに文字のある書を目で読むだけだから、文字にこだわって、その紙背にある物事の道理を見通すことができない。

宜しく心眼を開いて、文字のない書物、即ち実社会の種々の事柄を心読して、己の修養に資するべきだ。そうすれば、明らかに己の心に悟るところがあるだろう。

(余説) 書物を読む場合、ただ文字の上っ面の意味を追うのではなく、それを書いた人の真の意味やその背景、その歴史性などを考え、静慮することが大切だと言われます。

しかし「字のない処を読む」ことは、難しいことです。そのためには、己の身を省みたり、現実の世の中や思いを馳せつつ、二回・三回と繰り返し読むことも大切です。

太平洋戦争の終結に貢献した、海軍大将将米内光政は同じ本を三回読んだと、彼の伝記にあります。(同じ海軍大将井上成美だったかも? 阿川弘之著の海軍提督三部作から)

(参考) 渡部昇一「本は何度も繰り返し読んでこそ価値がある。」

(知的人生のための考え方・PHP 新書)

「眼光紙背に徹す」 書物字句の解釈のみに留まらず、その真意を読み取ること。

「行間を読む」：文字面に現れていない筆者の真意などをくみ取ること。